

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 桑江 暢也
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.40 No.2
2016.3.1
(通巻 236号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

JANPS2015 技術開発賞を受賞して	富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)	3
JANPS2015 技術開発奨励賞を受賞して	(株)インテック	5
	(株)東京機械製作所	6
	ニッカ(株)	7
	方正(株)	8
JANPS2015 技術開発奨励賞「特別賞」を受賞して	(株)朝日プリンテック	9
	サカタイクス(株)	10
	DIC グラフィックス(株)	11
	東京インキ(株)	12
	東洋インキ(株)	12
	日本新聞インキ(株)	13
CONPT-TOUR 2016 の見どころ	日本経済新聞社 OB 三宅 順	14
page2016 視察記	(有)メディアテクノス 代表取締役 井上 秋男	16
楽事万歳	日本経済新聞大阪本社 製作本部長 矢木 正哉	20
わが職場あれこれ	デーリー東北新聞社 システム技術局システム企画部次長 渡邊 聡	21
	(株)産経新聞印刷 北摂センター次長 表原 隆	21
新入会のことば	(株)イワタ 代表取締役 水野 昭	22
	藤倉ゴム工業(株) 営業本部印材営業部長 杉本 寿紀	22
第34回新聞製作人新年合同名刺交換会開く		23
CONPT日誌他		24
新着資料他		24

●表紙写真提供：「CONPT-TOUR2015 入選作より」

(株)日経東京製作センター・小澤 一彰氏「フィンランドの妖精 トントウの人形」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

JANPS2015 技術開発賞を受賞して

「新聞用完全無処理サーマル CTP プレート SUPERIA ZN」

富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)

このたび、当社の新聞用完全無処理サーマルCTPプレート『SUPERIA ZN』が、日本新聞協会より技術開発賞を受賞いたしました。これもひとえに、PS版時代から長年にわたり当社を支えてくださっている新聞社の皆さまのご支援の賜物と、深く御礼を申し上げます。

『SUPERIA ZN』は、当社がこれまで培ってきた独自の刷版製造技術を活かして開発を進め、新聞用としては国内で初めて実用化を果たした完全無処理プレートです。多くの新聞社で高い評価をいただいている有処理タイプのサーマルネガプレート『HN-NV』の刷りやすさと、商業印刷分野で実績のある完全無処理プレート『SUPERIA ZP』の優れた機上現像性を両立させるとともに、3つの新技術を加えることで、完成に至りました。



表彰状を持つ真茅社長(左から2人目)

■新聞印刷に対応するための3つの課題

新聞用完全無処理プレートの実用化には、3つの課題がありました。

第1に、耐刷力の強化。輪転機による高速・大部数の印刷に耐えられるよう、画像部の強度を高める必要がありました。

第2に、エッジ汚れの防止。有処理プレートの『HN-NV』では、エッジ部にガムを塗布

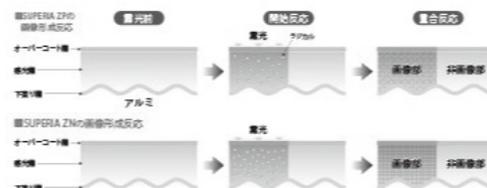
することで親水化を図り、汚れを防止していますが、無処理プレートの場合、ガム処理工程を経ないため、あらかじめエッジ部に親水化処理を施して同様の効果を持たせる必要がありました。

そして第3の課題は、定評ある『HN-NV』と同等の使い勝手です。お客さまがよりスムーズに無処理プレートへの移行を進めることができ、省力化・生産性向上のメリットを最大限に得られるよう、現場での取り扱い性や、既設CTPセッター・輪転機への適合性も重視し開発を進めました。これらの要件を満たすため、新たに導入したのが、以下に紹介する3つの技術です。

■新技術①超高次元ネットワーク化(HDN)技術

露光による重合反応で画像部を形成するネガ型プレートにおいて、より高い耐刷力を得るためには、CTPセッターの露光エネルギーを、できるだけ効率よく重合反応に結び付けることが有効です。そこで、『SUPERIA ZN』では、感光層の処方を一から見直し、画像形成に必要な成分だけに最適化。

その結果、従来の完全無処理プレートに比



感光層の重合反応をより効率的に促進するHDN技術により、新聞印刷で求められる高い耐刷性を実現

べ反応効率が約3倍に高まり、新聞印刷用途に耐えうる高耐刷性を実現しました。

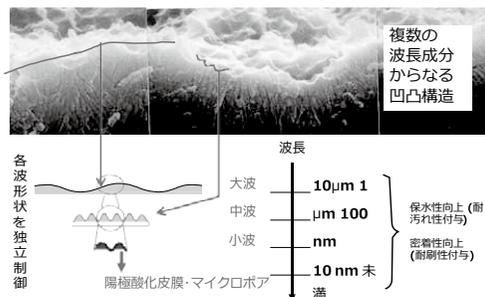
■新技術②マルチグレインZ (MGZ) 技術

『HN-NV』をはじめとする富士フィルムのサーマルプレートで定評のある砂目技術『MGV』をさらに進化させたものが、「MGZ技術」です。

最大の特長は、表面形状がより微細になったこと。富士フィルムのプレートでは、支持体に複数の波長からなる凹凸構造の砂目を付与しており、それぞれの波の構造は独立的に制御されています。MGV砂目では、深さ10μmサイズの「大波」を深く均一に、1μmサイズの「中波」を滑らかかつ大きめに加工し、さらに100nmサイズの「小波」を余すところなく重畳付与することで、保水性(=耐汚れ性)と、画像部感光層との密着性(=耐刷性)を両立させています。

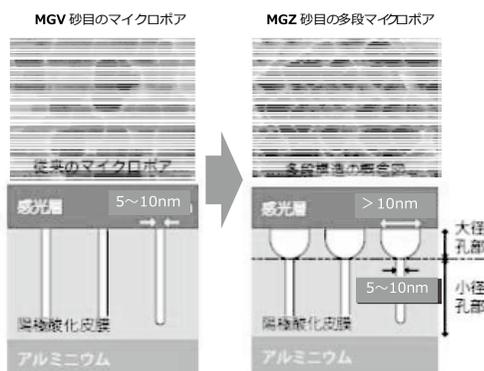
MGZ砂目では、新たに開発した「陽極酸化皮膜のナノオーダー形状制御技術」によって、5~10nm径のマイクロポアにワイングラスの上部のような多段構造を付与しています。

10nmを超える径の「大径孔部」は、感光層との密着性を高めて耐刷性向上に寄与。さらに、5~10nm径の「小径孔部」によって下層との連通路が小さくなり、下層深くまでのインキ・感光層の滲入を抑制。これにより、耐刷性・耐汚れ性・刷り出し時の機上現像性が一

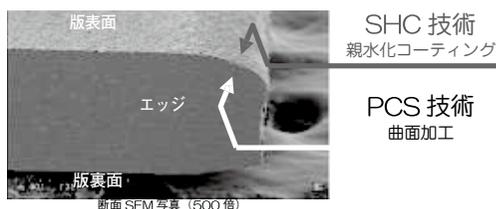


MGZ技術による支持体の砂目構造。複数の波長からなる凹凸構造を最適制御することで、機上現像性が一段と向上

段と向上しました。



MGZ技術では、マイクロポアを多段構造化。感光層との密着性を高めると同時に、下層深くまでのインキ・感光層の滲入を抑制



PCS技術によって曲面加工されたエッジ部のごく限られた範囲を、SHC技術により親水化処理することで、エッジ汚れを確実に防止

■新技術③極細親水化コーティング(SHC) 技術

エッジ汚れを防止するための親水化技術です。有処理タイプの『HN-NV』ではガムの塗布によって汚れを防止していますが、機上現像方式の完全無処理プレートの場合、ガム処理の工程がありません。そこで、『SUPERIA ZN』では、エッジ部に親水性を付与する独自のコーティングを施すことで、『HN-NV』と同様、エッジ汚れを確実に抑制することが可能になりました。

*

こうした新規技術の複合的投入により、輪転機での高速印刷に対応し、高い紙面品質が安定して得られる新聞用完全無処理プレート

の製品化に至りました。すでに活用されているお客さまからは、整面性、耐刷性、耐エッジ汚れ性、印刷品質のすべてにおいて、高いご評価をいただいています。自動現像機のメンテナンスが不要になったことで、その分輪転機のメンテナンスに時間をかけることができ、印刷紙面の品質向上につながったとも伺っています。

また、機上現像する前の版は、印刷にも耐える丈夫な感光層に覆われているため、ハンドリングによって砂目を傷つけることがなく、キズによる汚れも減り、印刷開始時の安定性アップを実現することができました。

近年、新聞印刷でも一層の環境負荷低減およびコスト削減が求められており、そうした社会的要請に応えるためのソリューションとして、『SUPERIA ZN』が新聞社の皆さまのお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、実用化にあたって多大なご協力をいただいた読売新聞社、中日新聞社の皆様に、この場を借りて、あらためて御礼を申し上げます。

富士フイルムは今後も継続して現場の声を聞きながら、『SUPERIA』を軸とした革新的なソリューションの開発に取り組み、新聞業界の発展に貢献してまいります。

JANPS2015 技術開発奨励賞を受賞して

(株)インテック

— 広告管理システム —

インテックは長年新聞制作システムの開発に携わり、最近では特に広告に関連するソリューションに力を入れてまいりました。また、国内3地域7か所の堅牢なデータセンターを核として、各種クラウドサービスにも力を入れております。

この度、JANPS2015出展において、弊社広告管理システムを技術開発奨励賞にご選考頂き、大変光栄に存じます。選考頂きました委員会他関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

■開発コンセプト

弊社の広告管理システムは2002年より開発・導入を開始し、現在では13の新聞社で稼働しております。開発当初より新聞広告掲載に関わる全ての業務を一体型システムでご提供させて頂き、「ムリ・ムダ・ミスを無くす」事をコンセプトにご提案しております。この

コンセプトに至った理由については、広告掲載申込、広告割付、原稿入稿、売上・請求、入金といった各種広告業務が、それぞれ別のシステム/ワークフローで動いている場合、どうしても情報の受け渡しでミスが発生し、「誤掲載、誤請求、掲載漏れ」といった信用問題に発展する恐れがあるとの結論に達した為です。

結果多くのお客さまにこのコンセプトを受け入れて頂き、また掲載事故、請求事故が激減した、とのご評価も頂いております。

■災害対策

近年、災害対策・事業継続計画が大きく取り沙汰されております。特に広告管理システムは顧客情報、売上・入金情報、広告原稿など重要な情報を多数持つており、この情報をいかに保護した上で業務を継続するか、という事が非常に重要となります。この問題を解決する為に「災害対策システムをクラウド上で稼働させる」、という事はここ数年のクラウドの劇的な普及から自然な発想でありました。

■プライベートクラウドの採用

しかしながら広告管理システムをクラウド上で運用する為にはいくつかの課題がありました。①誰でもアクセスできるパブリッククラウドの採用はセキュリティ上好ましくない事、②クラウド基盤が堅牢なデータセンターで運営されるセキュアな基盤である事、③安全、高速かつ十分なネットワーク帯域がある事、が挙げられます。これらの課題は弊社データセンター上のリソース型仮想サーバー基盤である「EINS/SPS SelfPortal」とオールインワン提供の仮想専用線サービス「EINS/MOW DCAN」を採用する事で解決しました。これにより、災害対策システムをプライベートクラウド上で稼働させる目処が立ったと言えます。

■本番システムとして

災害対策システムがプライベートクラウド上で稼働する、という事はほぼ本番システムとしても稼働できる、という事になります。本番システムで稼働させる場合、仮想サーバー基盤のリソースを追加する/管理型サービス「EINS/SPS Managed」にグレードアップする、さらに遠隔地バックアップサービス「EINS/BR」や、「EINS/VDC」といったサービスを追加する事でより安心して本番システムとして稼働させることができます。

最後に弊社クラウドサービスをベースとした広告管理システム災害対策システム導入を決定頂きました岩手日報をはじめ、これまで導入頂きました各社の皆様に紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

(株)東京機械製作所

—刷版自動着脱装置 T-PLATER—

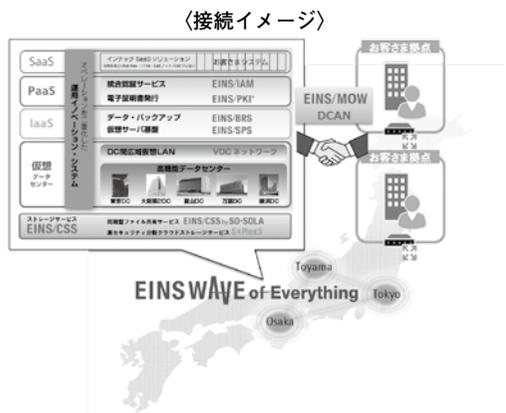
この度、刷版自動着脱装置「T-PLATER」が、栄えある「技術開発奨励賞」を頂戴し、大変光栄に存じます。選考頂きました技術委員会他、関係各位に改めて御礼を申し上げます。

*

刷版自動着脱装置「T-PLATER」は、刷版装着から取り外しまでを簡単なボタン操作で行うことを可能にしました。これにより、受託印刷を含め印刷媒体の多様化に伴って増加している版替え作業を軽減し、省人・省力化に多大な効果を発揮すると考えております。昨今、新聞印刷工場における人員削減は、解決すべきテーマのひとつとなっています。そうした中、受託印刷を含め印刷媒体は多様化しており、実際に版替えの回数が増えている現状があります。版替えを少しでも早く行いたい、作業時間を短縮しオペレーターの負担を軽減したい、「T-PLATER」は、そういった現場からの大きな期待に応じて開発されました。

*

きっかけは、私どもが中日新聞浜松都田工場の輪転機導入計画に関わった2014年にさかのほります。2016年12月稼働予定の中日新聞社の新工場に対して、私どもは自信を持って4×1型輪転機カラートップエコワイドをご提案致しましたが、中日新聞社の技術陣から、



解決すべき課題のひとつとして、「新工場は版替えが多い。少しでも版替えにかかる作業時間を短くしたい」というご要望を頂きました。そこで、実際に既存工場において版替え時間を計測して頂き、輪転機の動作シーケンスと照らし合わせながら分析を進めました。そして、版替え時間短縮の「決定打」はないかと模索した結果が、この「T-PLATER」でありました。お陰様をもちまして、中日新聞社には「T-PLATER」の機能を高くご評価いただき、浜松都田工場にはカラートップエコワイド×2セット導入の運びとなりました。

*

昨年のJANPS2015では、弊社かずさテクノセンターにおける実演運転のライブ中継を行い好評を博しました。そして、JANPS以降も装置の軽量化、故障時の対応、ブランケット洗浄装置との取り合いなど、実機を使った検証の中から様々な指摘を頂き、改良を重ねてまいりました。今後さらに中日新聞社と連携しながら、私どもは「T-PLATER」の機能を進化させていこうと考えております。具体的には、上流工程からの情報を利用して「T-PLATER」を一元操作し、版間時には、交換を要する刷版のみを一斉に脱版することや、運転終了時や媒体切り替え時に、全ての刷版を一斉に脱版することを計画しております。

「T-PLATER」は、中日新聞浜松都田工場に続き、山陽新聞社の新印刷センターにもご採用が決定しております。私どもでは、今後新たに輪転機更新を計画される新聞社に対しても、「T-PLATER」をご提案申しあげ、新工場の人員削減、版替え作業の軽減に貢献できればと考えております。

*

「T-PLATER」は、刷版1枚から上下段8枚

までを一度に着脱する事が可能です。刷版の着脱にかかる作業時間が飛躍的に短縮され、オペレーターの作業が大幅に軽減されます。仮に1タワー分の刷版交換(32枚)を従来通りオペレーター1人で行った場合の所要時間は、移動時間等を含まない単純計算で、約1440秒(24分)を要します。「T-PLATER」を使えば、上下段8枚の刷版を同時に着脱する動作は約40秒で完了しますので、約320秒(5.3分)で済みます。版掛け作業によるオペレーターの負担軽減、印刷準備時間の短縮に多大な効果を発揮する、強力な省人・省力化装置といえると思います。

*

私ども東京機械製作所は、今回の受賞に慢心することなく、今後もお客様のご要望にお応えできるような新技術の開発に努めてまいり所存です。変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

ニッカ株

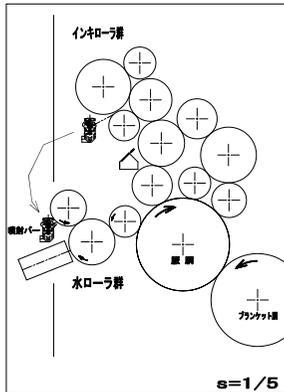
—インキローラー洗浄装置 ARW- II—

この度、JANPS2015において、インキローラー洗浄装置(ARW-II)が技術開発奨励賞の栄えある栄誉を頂き、誠に光栄に存じます。ご選考頂きました委員会他関係者の皆様、開発にあたりご協力を賜りました中日新聞社ご関係者の皆様、東洋インキご関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

*

さて、受賞しましたARW-II開発経緯について簡単にご紹介させていただきます。

いわゆる薄膜印刷の弊害である「水ローラー群を含むインキローラー群の洗浄不良」問題に対応した洗浄システムです。



〈ARW- II 配置Model〉

近年の新聞印刷市場のトレンドである薄膜印刷は、印刷資材コスト削減を目的として「用紙の減斤化」「インキの高濃度化」「印刷線数の高精細化」により、インキ盛量を低減した印刷となっています。この条件下では、印刷機上のインキが少ない分、その溶剤分の揮発性が促進され、ローラー上にインキが固着する事での洗浄残りが問題となっています。特に、フリーローラーである水ライダーローラーを含む、水ローラー群の洗浄にも効果を発揮し、この問題を解決するにはと考えた結果が、従来の洗浄液吐出位置に拘らずに水ローラー側に装置本体を設ける事で、洗浄残りが解決できました。これにより、洗い残しの手拭き作業も無くす省人化の効果が得られ、また、従来の吐出位置で問題となっていた洗浄液吐出装置本体のインキミストによる汚れ除去作業や、水ローラー洗浄をする為の余剰な洗浄液量と廃液回収量も削減でき、ドクター部、プレスワッシャー部の清掃メンテナンス作業の軽減にもつながる事が確認できました。

*

更には、弊社製水性洗浄液を使用する事により、水ローラー周りのローラーを含んでも、1回あたりの洗浄液量を100cc前後に抑える事も可能となり、ランニングコストにも大きく

貢献できるシステムとなる事が検証されました。

今後とも、新聞製作技術の進歩に遅れをとらぬ様、豊かな発想とお客様の声をカタチにする弊社のモットーを念頭に、周辺機器メーカーとして新聞製作に貢献してまいりたいと考えております。

方正(株)

— Web 記者 PC ・ Web 組版 —

この度、JANPS2015において「Web記者PC」「Web組版」が「技術開発奨励賞」に選定いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。また、このシステム開発にあたり、多くのアイデアを頂戴しました日刊スポーツ新聞社に心から感謝申し上げます。

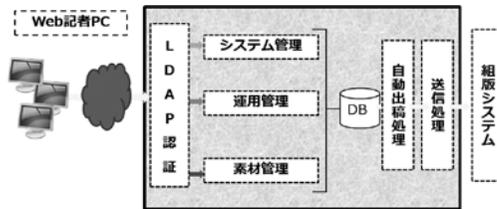
展示いたしました2つのシステムは、すでに実装されているWeb記者PCと、そこから派生し、開発中であるWeb組版とに分かれます。いずれも従来の専用PCによる、ソフトウェアライセンスの負荷を軽減し、クラウドアプリの特性を生かしたバージョンアップ費用の無駄を省くことを目的としています。また、使用料金という考え方により、初期投資の抑制を実現、設備投資の平準化を図ります。

*

まず、Web記者PCですが、ご存知の通り、記事・画像の作成、編集、検索、出稿、複写などを基本機能とし、さらには記事の、改削、分割、校閲、入力補助、画像のダウンロードや属性変更などが標準搭載されています。極端に重いデータを扱っているわけではないので、固定のアプリに固執する理由はありませんが、長年の習慣からか、使い慣れたシステムを継続利用しているケースがほとんどでした。

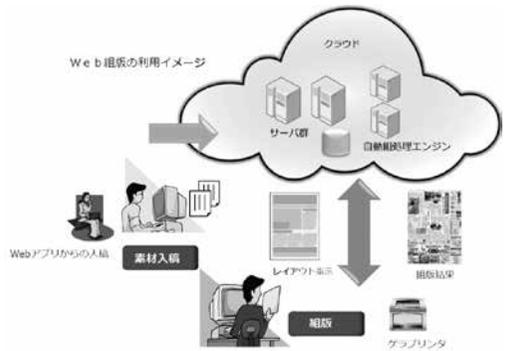
しかし、今後、取材活動が多様化していく

中で、記者の方の増減や急な異動にも柔軟に対応し、即時性を担保していくことは重要なテーマとなります。パスワードによって、PCを選ばず、インターネット環境さえあれば、どこからでも記事、画像の送稿が可能となることは、従来は課題であった、PCの故障、送稿アプリの不調、災害の発生時など、予想外の事態にも対処可能な仕組みとなるわけです。



一方、Web組版は、クラウドコンピューティングプラットフォームを利用した、ブラウザベース上で動作する組版システムであり、単にデータセンターにシステムを置くだけのクラウド組版の一步先を視野に入れたものとなります。当然、各新聞社での大判本紙を編集するにあたっては、データの負荷や文字フォントの問題もあり、必ずしも適正とは言いきれませんが、今後のニーズの多様化、小ロット多媒体化、それによって起こるであろう紙面改革につながるチャレンジであると考えています。

*



クラウド組版と同様に、機材の拡張が柔軟に行えることにより、組版PCの機能の処理をサーバ上でを行い、PCはシンクライアント方式にすることができます。

このことで、ランニングコストの大幅削減ができます。利用イメージは、記事・画像をクラウド上のCMSに送信し、該当する面の素材名を簡易割付画面より指示し、素材を割り付けます。さらにクラウド上のサーバ経由で組版を行い、Webアプリ上に表示、確認します。印刷指示もWebアプリから顧客側のプリンタに出力、降版指示も同様に指定のCTPにデータを送信します。対応ブラウザは、当面IE、Firefox、Safariを想定し運用します。

いずれにしても、本来の新聞社におけるコンテンツファーストの考え方にに基づき、5年先10年先の業界標準のツールを目指していきたいと考えています。

JANPS2015 技術開発奨励賞「特別賞」を受賞して

(株)朝日プリンテック

— ゴムローラ再生装置 —

JANPS2015に弊社が出展した「ゴムローラ再生装置」に対しまして、このたび技術開発奨

励賞「特別賞」を頂戴し、大変ありがたく、かつ光栄に存じます。

この「ゴムローラ再生装置」は、数年で劣化する輪転機のゴムローラの内部に専用の薬剤を浸透させることにより、短時間でローラを再利用できるようにするものです。

現在、劣化したゴムローラはすべてメーカ

ーに交換や巻き替えを依頼していますが、全国に9工場を展開する弊社の場合、その費用は相当の金額にのぼります。その作業をこの装置を使うことによって内製化できれば、大幅なコスト削減になると期待されています。

JANPSには試作機を展示いたしました、各社の関心も高く、こうした装置のニーズが高いことを実感いたしました。技術開発奨励賞は本来、メーカーを対象にしたものと承知していますが、今回ユーザーである弊社が「特別賞」をいただくことができたのは、まさにユーザー仲間である他の新聞印刷会社の皆様からのご支援と、日本新聞協会のご配慮によるものと改めて感謝申し上げます。

*

新聞業界を取り巻く経営環境は悪化の一途を辿っており、各社とも新聞製作コストの削減に必死で取り組んでいます。それは輪転機といった大型設備のみならず、日常の消耗品のランニングコストの見直しにも及びます。

そうした観点から、弊社の技術陣が、いわば発想の転換でローラの「自前の再生」を思い立ち、数年来、開発に向け試行錯誤を重ねてまいりました。

具体的に言いますと、長年使用されたローラは、巻き替えたローラと比べて径が小さくなっており、ローラの表面にインキ・紙粉などの不純物が付着して鏡面化しています。そこで、ローラを再生するには、①ローラ硬度を下げる、②ローラ径を増加させること、③不純物を除去すること、の3つのハードルをクリアしなければなりません。

このため、開発にあたっては、ローラの硬度や径の測定という地道な作業から始め、どのような溶剤をどの程度の圧力でローラに浸透させると、再生効果が出るのか、といった検証を丹念に積み重ねていきました。とりわけ、溶剤をローラの表面全体に均等に行き渡らせるための機能開発に工夫が必要でした。

現在は、水着けローラ、インキ着けローラ、それ以外のローラによって効果に違いがあるかどうかデータを収集している段階です。

さらに今後は、どのメーカーの輪転機でもゴムローラが同じレベルで再生できるかなど、より幅の広い検証作業を予定しています。そうした検証が終わり、かつ、他社からのご要望がある場合には、幅広く販売することも検討してまいります。

*

新聞印刷の世界ではこの数年、デジタル印刷機の開発が進み、輪転機との性能比較が盛んに行われるなど、「デジタルからの挑戦」を受けています。しかしながら、当分の間、技術の成熟したオフセット輪転機の性能を上回るのには難しい状況です。

であるならば、なおさら、輪転機の可能性を、周辺設備、消耗品も含め、とことん追求していかなければなりません。その際、ユーザー側は開発をメーカーだけに任せるのではなく、ユーザーとしての立場からメーカーに対し積極的にアイデアを出していく姿勢が必要になるのではないのでしょうか。

今回の受賞に際し、私どものそうした姿勢が多少なりとも評価されたとすれば、うれしい限りです。今後とも、新聞業界の未来に貢献できるよう、ささやかながら弊社としても一層の努力を重ねていきたいと願っています。

—次世代墨インキの開発—

サカタインクス(株)

この度、JANPS2015において、栄えある技術開発奨励賞「特別賞」に、弊社「高品位墨インキ」をご選定頂きました事、大変光栄に存じます。ご選定頂きました委員会他、関係

者の皆様方に心より感謝申し上げます。

新聞業界は、核家族化や若者の新聞離れ、デジタルコンテンツの台頭により厳しい状況に置かれております。今こそ新たな技術による現状の打開が必要と考えます。

弊社はJANPS2005に、新聞輪転機によるセミコマース印刷の取り込みを進めるアイテムとして、初めて高濃度色インキ「ルーチェ」を発表致しました。

業界初のこのインキは、新聞紙面品質向上に大きな影響を与え、「高精細化」や「用紙の減斤化」技術との組み合わせで、紙面高品質化に重要な役割を果たしました。

*

今回、墨インキのドライダウンに着目し、読者が印刷直後の濃度感のある紙面を手でできるように、更なる紙面品質の向上も含め取り組んだ結果、「高品位墨インキ」が完成しました。

インキ中の顔料量とドライダウン現象には必ずしも相関性は無く、特に墨インキにおいては、高濃度化に伴い紙面上のインキ膜厚を下げる事は、紙面品質と印刷作業性を維持する上で不利となると考えられます。

そこで、用紙へのインキ浸透を抑制する方法と、用紙表面に残る顔料やビヒクルのセット時間をコントロールする方法を融合した独自技術により、ドライダウン量の抑制を実現しています。

これにより印刷現場での濃度調整作業がしやすくなり、操作性が向上し、オペレーターの作業軽減と紙面品質の向上に繋がります。

高品位墨インキでの印刷紙面は、従来墨インキより濃度感が得られ、読者に対しインパクトのある紙面提供が可能となります。

弊社は、今年の11月には創業120周年を迎える節目の年となります。新聞インキを主に、印刷業界発展の為に更なる技術開発に尽力し、業界発展の一役を担って行く所存です。

これからも宜しく願い申し上げます。

DICグラフィックス(株)

この度、JANPS2015において、弊社新聞用高濃度墨インキ「PROUD DX（デラックス）」を栄えある技術開発奨励賞「特別賞」にご選出頂き、大変光栄に存じます。選考頂きました委員会他関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。

弊社新聞用高濃度インキ「PROUD」シリーズは2009年よりカラーインキについて開発を行ない2011年より販売を開始致しました。顔料濃度を上げることで高濃度化を図り、印刷適性を付与しました。インキの使用量削減、裏抜けの軽減、セットオフの軽減等の優位性が見られ、現在まで56工場に出荷し、高いご評価を頂いております。

*

今回出展いたしました高濃度墨インキ「PROUD DX」は新聞社からのご要望に応え2012年より開発を進めて参りました。墨の高濃度化の開発に当たっては、従来から対応していた補色の添加やドライダウンの抑制ではなく、あくまでもカラーインキと同様に『顔料濃度を上げること』をコンセプトと致しました。しかしながら単純に顔料濃度を上げることは、墨インキの配合組成から、分散性、転移性、印刷適性等の多くの課題がありました。その課題を解決するには、基礎からの配合検討が必要となり、新規樹脂の開発、新規ワニスの設定、最適なカーボンブラック種の選定及び含有量を決定することで、基本物性を合わせることに成功致しました。市場テストにおいては、墨印刷特有の単色ベタの着肉、ガイドローラ汚れ、後胴残り等のパイリング、版磨耗性他を行ない、今回の販売開始に至りました。

*

旧インクテックの配合技術と旧DICの合成技術との融合によりこれまで増やせないとされていたカーボンブラックを増量した業界初の高濃度墨インキが、今回の御評価に繋がったものと考えております。

DICグラフィックスは、今後もお客様の御要望に応えるべく更なる努力を続ける所存でありますので、関係者の皆様には益々のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

東京インキ(株)

この度、JANPS2015出展において、弊社高漆黒性新聞用墨インキ「ニューズメジャー クロマBk」が栄えある技術開発奨励賞「特別賞」を頂き大変光栄に存じております。選定に際して委員会および業界関係者の皆様方に心から御礼申し上げます。

今回開発致しました高漆黒性墨インキへの取り組みは、各新聞社において高濃度カラーインキの検討採用がなされ使用開始された頃、各新聞社の技術担当者より使用量が多い墨インキについても紙面品質の向上、諸資材の削減、環境負荷への低減等に向けて開発検討への打診が逐次ありました。

*

当初は高濃度カラーインキと類似の配合手法にて開発に取り組みましたが、カーボンブラック含有率の増量だけでは期待しうる濃度、着肉性、高速適性、インキ量の削減効果等を含めた印刷適性において、満足し得る結果が見出せない状況でありました。この為いかにローラー転移性を損なわずに版・ブランケットを介して、紙面へより多くの墨インキが定着するかを開発コンセプトに設計手法を

180度転換し開発を進めました。

この中で高漆黒性機能の要となる3点の開発ポイントを設定して、日夜試作検討を重ね開発に取り組みました。

3点の主たる開発ポイントは、①カーボンブラックに対して、高粘性溶剤の適用とビヒクル(印刷適性、印刷品質を司る樹脂ワニス)成分への湿潤性を高める分散剤の使用により、カーボンブラックの分散性および濡れ性を最適化する②高溶解、高分岐型の高分子樹脂を使用し高速適性、乳化耐性および汚れ耐性の向上③粒子径の異なる数種類のカーボンブラックを選定して、カーボンブラック含有率を極度に高めることなく、紙面上により多くのカーボンブラックの定着を図る—ということでありました。

*

この様な設計手法にて試作製造をした高漆黒性墨インキの実機検証を繰り返し行い、高い漆黒性効果によるシャープでメリハリのある紙面品質、汚れ耐性の効果からの立ち上げ時の損紙低減、並びに高濃度カラーインキに匹敵する大幅なインキ使用量の削減や作業適性も含めて良好な結果が得られました。

この様に「ニューズメジャー クロマBk」は紙面品質の向上はもとより諸資材への削減、作業環境負荷への改善が図れた製品ですが、東京インキは今製品の開発に止まらず積極的に改良・改善を進めて行く次第です。

東洋インキ(株)

この度はJANPS2015において「ドライダウン抑制墨インキ」が技術開発奨励賞「特別賞」の栄えある栄誉を頂き、大変光栄に存じます。選定頂きました委員会他、業界関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

本製品は2011年の弊社プライベートショー

にて、高濃度カラーインキ「ヴァンテアンエコーリオシリーズ」と共に、業界に先駆け、墨インキの紙面品質向上とマイレージ効果を求めた次世代インキとして発表致しました。

開発の初期段階では、カラーインキ同様に顔料(カーボン)比率を更に増やすという検討も行いました。しかしながら、当社墨インキは、従来品と云えどもカーボン含有比率は高く、カーボン含有比率の更なる増量は転移性の劣化による印刷濃度の低下を招き、印刷適性面やケミカルレスプレートでの耐刷性も課題となりました。

*

そこで、今回の開発品は、新聞印刷における長年の課題であった「ドライダウ抑制」によるインキ使用量削減という発想で開発に取り組みました。開発品は、ドライダウンが従来品より少ないという新規カーボン種を採用すると共に、新規高分散樹脂および分散剤の最適化により、着肉性や網点再現性、DIPや壺元からのインキ吐出安定性、耐刷性にも優れております。また、カーボン自体の青味色相が強く、従来品以上の黒色感がある為、印刷紙面のメリハリ感が向上しております。

弊社はこれまで、新聞市場へ「高演色プロセスインキ」・「新聞カレイドインキ」の製品、CMSとして「キャロシエプロファイル」等の新規技術の開発を行ってきました。今後も新聞社が求める紙面品質・生産性向上と環境負荷低減に繋がる様、新たなコンセプトを持った次世代インキ並びにソリューションを提案し、業界全体の発展に貢献して参ります。

日本新聞インキ(株)

この度、JANPS2015において弊社高濃度(高黒色)インキ「グランツ墨」が栄えある技術開発奨励賞「特別賞」にご選定頂き大変光栄に

存じます。選定頂きました委員会他関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

近年、新聞印刷を取り巻く環境は、用紙の減斤化、網点の高精細化やGCR/UCRなど、印刷資材共に大きく改革が進んでいます。2010年以降、弊社においてもカラー紙面品質向上はもとより、使用量の削減による生産性の向上および環境負荷の低減を目指し、高濃度カラーインキVEGA-MX(グランツ)シリーズの開発を進め、現在十数社の新聞社印刷工場での採用に至っております。

*

このような中、各新聞社においては、インキ使用量が最も多い墨インキの高濃度化による資材削減効果が、カラーインキ以上に得られるものとニーズが高まってきており、弊社においてもJANPS 2007で従来の墨インキ(VEGAシリーズ)に比べレベリングの良化および低ドライダウン型インキとしてVEGA-MX墨シリーズを発表、2014年より高濃度・高黒色墨インキへの取り組みを更に進め、JANPS 2015で「艶墨への挑戦」と題したVEGA-MXグランツ墨を発表しました。

実印刷開始当初は種々の課題解消に時間を要しましたが、各新聞社のご協力の下、現在はツボ方式用、DIP方式用共に印刷適性の改善が図られ、数社で採用頂いております。高濃度(高黒色)墨インキの最終目的は、高濃度カラーインキと同様に使用量の削減による生産性の向上を主に、紙面品質の向上、更には印刷現場の作業環境改善にあります。インキメーカーとして最良のインキを提供すると共に、更なる高品質化を目指して行きたいと考えておりますので今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

CONPT-TOUR 2016の見どころ

日本経済新聞社 OB 三宅 順

今年のCONPT-TOURはドイツで開催される「第16回drupa 2016」の視察を中心に、英国の新聞社Financial Times (FT)、イタリアの印刷会社CSQ、新聞社イルソーレ24 オーレの3社を訪問する予定だ。日程は6月2日出国、10日帰国の予定。本稿ではその見どころを紹介する。なお現在、FTとは工場見学を含めて交渉中だ。

《drupa 2016 (ドイツ・デュッセルドルフ)》

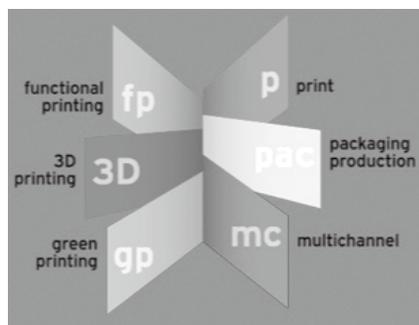
drupa (ドルッパ)とはドイツ語で「印刷」と「紙」を合成した造語だ。1951年に第1回目が開かれ、以後4年に一度開催され今年が16回目となる世界最大の印刷・クロスメディアソリューションの展示会(国際総合印刷機材展)だ。今年のメインテーマは「タッチ・ザ・フューチャー」ということで、世界中の印刷に関する最新のトレンドとイノベーションが集結し、新聞業界のみならず商業印刷・出版業界のこれからの技術動向を知る上では必見の展示会である。



今年のdrupaはデュッセルドルフの見本市会場19ホールを使って開かれ、50を超える国々から1800以上の企業が出展し、16万5000平方メートルにわたって、革新的なビジネスモデル、最新のソリューション、技術が展示される見込みだ。

今開催では6つのハイライトテーマが既に次のように設定されている。

- ・印刷
- ・パッケージ印刷
- ・マルチチャネル
- ・機能性印刷
- ・3D印刷
- ・環境印刷



2月25日現在の出展予希望社数を部門別に見ると、以下の通りだ。

- ・ブリプレス/印刷(357社)
- ・プリメディア/マルチチャネル(59社)
- ・ポストプレス/印刷物加工/包装(451社)
- ・未来技術(87社)
- ・資材(335社)
- ・装置/サービス/インフラ(414社)

今後さらに出展社は増えるだろう。



前回のdrupa2012の会場風景

まだ各社からの展示内容が公表されていないため、ここ数回のdrupa展の傾向から、今回の見どころを予想してみよう。

今回もやはり「インクジェット」の技術が中心になると考えられる。さらに進化したインクジェットの技術や前記6大テーマと融合した新たな活用方法などのイノベーションが見られるものと思う。

《FT (英国・ロンドン)》



サーモンピンクの紙面として知られるFTは1888年、英国ロンドンで創刊された「ロンドン・フィナンシャル・ガイド」が基になり、1945年に競合紙「ファイナンシャル・ニューズ」と合併して現在の社名となった。

その後、経済のグローバル化を反映して、1979年フランクフルトで初の国外版FTを印刷し、現在は全世界22の都市で発行し、国際的な経済紙となっている。昨年11月には日経グループ入りし、世界最大の経済メディアの誕生となった。

印刷は世界の18か所でおこなわれ、発行部数は国内よりも海外での部数が多く、合計すると78万部以上だという。また、購読者数の70%が電子版の読者だ。

電子版の発行は1995年に始まり、2007年には課金の従量制を初めて導入した。新聞の購読が紙から電子版へと移りつつある中、先行した同社の経験や今後の方針など、興味深いテーマについても話を聞けることだろう。

また、同紙を印刷する近くの印刷工場も見学させてもらう予定で交渉中だ。

《CSQ (イタリア・エルブスコ)》

正式名をCentro Stampa Quotidiani SpAといい、CSQと略される。同社は2000年4月に

創立された若い会社で、日刊紙・雑誌をはじめ多様な印刷をするミラノの東、エルブスコにある印刷会社だ。印刷物はイタリア北部、中部を中心に配布され、年間1億5千万部を印刷している。

同工場が所有する主要な設備はWIFAG EVOLUTION やHPのT230カラーインクジェット印刷機などだ。注目点はイタリアで最初に日刊紙の受託印刷にインクジェット印刷機を使ったことであろう。HPのカラーインクジェット印刷機(最大印刷幅520mm、最高印刷速度122m)を2013年より使用している。ターゲットは500~2000部程度の少部数印刷の地方紙や外国紙の顧客のようだ。デジタル・オフセット両方の印刷を見学し、特に受託印刷におけるインクジェット印刷機の成功した活用事例を学ぶことができるだろう。

《Il Sole 24 Ore (イタリア・ミラノ)》



同紙はConfindustria (イタリアの経団連に相当)が所有する日刊経済紙で、「Il Sole」と「24 Ore」が1965年に合併して創刊された。ミラノに本社がある。欧州の経済新聞としてはFT紙に次ぐ発行部数を誇り、

電子版と紙の読者の合計は約34.3万部(全国紙で第3位)に達する。

新聞以外の事業としては、イタリアで最初のオンライン版(ilsole24ore.com)、ラジオ(Radio 24)、動画(Stream 24)などの情報サービスを行っている。

同社では印刷工場の見学は工場の場所が離れているため行わないが、編集を中心に見学させてもらう。情報発信のマルチチャンネル化にどのように対応しているか、収益はどうかなど、今後の日本の新聞社の在り方を考える上で大いに参考となるだろう。

page2016視察記

「次世代印刷メディア」の可能性示す

有限会社メディアテクノス 代表取締役 井上秋男(JAGAT客員研究員)

はじめに

印刷・ビジネスの総合イベント「page2016」は開催規模が昨年を上回り、来場者も7万人を突破するなど盛況裏に閉幕した。また、取り巻く環境変化に対応して「次世代印刷メディアの可能性」を示すカンファレンスや新製品の出展も相次ぎ有意義な展示会となった。以下、視察記として「開催概要」「みえてきたもの」「分野別出展動向」をレポートしたい。

■開催概要

公益社団法人日本印刷技術協会(JAGAT)主催の「第29回page2016」は「未来を創る－メディアビジネスの可能性を拓ける－」をテーマに、2月3日～5日までの3日間、東京・池袋のサンシャイン・コンベンションセンターで開催された。カンファレンスは基調講演含め21セッションに延べ74名のスピーカーが登場し、印刷メディアビジネスの拡大に向けての提言と最新事例紹介も相次ぎ、経営者や幹部も多数出席し賑わった。セミナーは13セッション開かれ、印刷会社の生産現場の改善や営業、マネージメント展開など「現場力やビジネス力向上」を目指す多彩なテーマで開催され、管理者・責任者らの出席が増加した。

展示会は文化会館B、C、Dの3ホールを使用し、出展社145社(前回140社)、出展小間数510小間(同508小間)、来場者は7万370人(同6万7990人)となった。

(注、出展社の略号)富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(FFGS)、キヤノンマーケティングジャパン(キヤノン)、コニカミノルタビジネスソリューションズ(コニカミノルタ)、リコージャパン(リコー)、メディアテクノロジージャパン(メディアテクノロジー)、日本アグファ・ゲバルト(日本アグファ)



賑わう展示会場

■みえてきたもの

①次世代印刷メディアの可能性示す

わが国の印刷メディア業界は、従来の「紙(モノ)づくり」から「付加価値(コト)づくりや新ビジネスづくり」に向け「マス印刷」から「非マス(マス・カスタマイゼーション)印刷」への大転換時代が到来した。page2016では、カンファレンス、セミナー、展示会を通じて「次世代印刷メディアの可能性」を実現するためのツールやソリューションが数多く紹介された。これらを視察した筆者のpage2016のイメージとして、従来の「オフセットVSデジタル印刷」+「紙VS電子メディア」から「(オフセット×デジタル印刷)+(紙×電子メディア)×マーケティングオートメーション=次世代印刷メディア」がみえてきた。

②トータルワークフローの重要性高まる

オフセットとデジタル印刷の特長を活かし新市場の創造や開拓を実現する「トータルワークフロー」の新バージョンが主要ベンダーから一堂に出展され、多品種小ロット+バリエーション印刷、オフセットの再版、デジタル印刷をオフセット印刷基準に合わせるカラーマネージメント、工程効率化、MIS連携など多彩なソリューションを紹介した。

③最新のデジタル印刷機勢揃い

マス・カスタマイズ印刷の中核となるデジタル印刷機の新製品が主要ベンダーから一斉に出展された。インクジェットデジタル印刷機(IJ機)は、展示スペースの関係でパネル、ビデオ、印刷サンプルによる紹介となった。トナーデジタル印刷機(トナー機)は、フラッグシップからエントリーモデルまで幅広く実機展示され、高速化、高品質化、各種用紙対応とプリプレスや後加工機との連携による「ブック、カタログ、パンフレット、DM、名刺、シールラベル、パッケージ」など多彩な印刷物を実演し来場者で賑わった。

④経営改革やマーケティング関連の

講演と出展増加

印刷メディア業界では従来のマスから非マスに対応するため、経営改革やマーケティングが重要な位置づけとなっている。カンファレンスでは顧客対応の強化拡充や収益アップに向けた「マーケティングオートメーション」が講演された。展示会では各社の実績、ノウハウによる経営改革支援やコンサルティングの紹介が増加した。

⑤ベンダーの提携・連携活発化

取り巻く環境変化や顧客への付加価値向上を図るためにpage2016ではベンダー間の提携・連携が活発化した。キヤノンとリコーは後加工機ベンダーのホリゾンブースに隣接し、デジタル印刷機で出力したブック、冊子、カタログなどのプリンティングファクトリーを実演した。リコーはコダックやシオザワとの連携、ハイデルベルグ・ジャパンはリコーや富士フイルムとの協業を紹介した。

■基調講演、カンファレンス

①基調講演：2月3日は「マーケティングオートメーションと印刷の未来」をテーマに、わが国有数のマーケティングコンサルタント会社代表の講演と印刷会社、広告制作会社、印刷コンサルタント会社の幹部と印刷の未来

について議論を交わした。

2月4日は「経営シンポジウム 印刷メディアのニッチ戦略」をテーマに、早稲田大学教授による「わが国におけるニッチ戦略の考え方、実例紹介」と印刷会社幹部と現状の取り組みについて意見交換した。2月5日は「紙メディアの特性と優位性、その科学的表現の可能性」と題して、紙や電子ペーパー研究者から科学データに基づいた「紙メディアの特性と電子メディアとの比較」を紹介した。まとめとして「紙と電子メディアが対立するのではなく、各々の特徴を活かした連携や使い分けが重要」と述べた。



基調講演

②新聞メディア関連のカンファレンス：「メディアと生活者との関係により変化するビジネスモデル」、「マスメディアの新たな挑戦」「2016年の情報メディアと印刷市場」「デジタル印刷の先端事例」などが注目を集めた。いずれもスマホなどデジタルメディアの普及拡大により、従来メディアはかなり厳しい状況となるため、「デジタルとの融合によりコンテンツの有効活用が重要」との発言が相次いだ。

■分野別出展動向

①編集制作のクロスメディア展開

出版分野のメディア多様化に対応して、ワンソースから印刷書籍と電子書籍の同時制作や汎用データ管理による2次利用を実現する「次世代DTP」の出展が相次いだ。NECは、講談社と共同開発した「出版社向けコンテンツ制作・管理ソリューションSmart Source Editor」を出展し、構造化データ(XML)による紙・電子書籍向けのクロスメディア展開の

紹介とKADOKAWAの導入も発表。**モリサワ**は、組版やeBookソリューション、多言語対応電子配信ツール、可変印刷ソリューションを紹介。**スターティアラボ**は、「紙媒体の売上向上に貢献するソリューション」として、1000社以上の実績を誇るAR制作ソフト「COCOAR」、3Dコンテンツ制作支援「studio Safari」、Ito1アプリを簡単に作成・運営する「AppGoose」を実演。

②プリプレスシステムのクラウド化

わが国の製造、流通、金融業界ではクラウド化が進んでいるが、page2016でもプリプレスシステムのクラウド出展が増加した。**モリサワ**は、クラウド組版ソリューションMC-Cloudを参考出品し、フォント、文字レイアウト技術をサーバー型レイアウトエンジンに搭載したクラウドサービスを実演した。**FFGS**は「クラウドベースのCMSシステムを初出展し、専任の担当者に頼らず、簡単な操作でCMSの構築・運用管理を紹介。**メディアテクノロジー**は、高精度な装置間色調整をクラウド上で行うソフトウェア「TRUST Profiler」を初出展。**日本アグフア**は、プリプレスワークフローソリューションとクラウド技術を融合した「Apogee Cloud」を初出展し、国内第1号を(株)ニシカワへの納入を発表。**方正**は、印刷物制作管理システムをクラウドで提供する「SkyProject-Cloud」やカタログ制作をクラウド上で行う「カタログ便利くん」を実演。

③カラーマネージメントの出展増加

印刷物の多様化や高品質化に伴い、オフセット・デジタル・ブルーフ印刷向け画像処理やカラーマネージメント(CMS)が重要な役割となり、主要ベンダーから新製品やソリューション出展が増加した。**FFGS**は、カラーマネージメントソリューションの新バージョンを出展し、単なる色合わせから、印刷工程全体を効率化し、新たな付加価値を生み出す「色品質管理」を紹介。**富士通**は、新製品のColorAffinity(仮称)を初出展し、オフセッ

ト印刷、POD出力、ブルーフ出力時に標準印刷再現などのカラーマネージメント処理により安定した印刷環境実現を紹介。



FFGSのCMS実演

④トータルワークフローの活用、拡大

page2016のトピックスの一つとして「トータルワークフロー」を挙げる人が多い。背景としてオフセット(CTP)とデジタル印刷によるハイブリッド印刷やデジタル印刷を効率よく運用するWeb to Print、面付け編集機能、カラーマネージメント、MIS連携などのトータルソリューションの本格化がある。**FFGS**は、次世代ハイブリッドワークフローXMFを軸としたPODソリューションを紹介。**キヤノン**は、PRISMA direct 1.2を初出展し、企業内集中印刷および商業印刷の受注から印刷までの統合管理を紹介。**メディアテクノロジー**は「EQUIOSで攻めの印刷経営」をテーマに、商業印刷ワークフローEQUIOSの新バージョンを国内初出展し、大貼機能搭載と作業の自動化と省力化を紹介。**リコー**は「マス・バリエーション印刷『千変万果』～デジタル×オフセット＝量産化」をテーマに、多彩な商材印刷や新ビジネス展開を実現する「Total FlowプリントサーバR-60」を出展し、ハイブリッド印刷、ジョブ管理、デバイス管理などを紹介した。**コニカミノルタ**は「印刷集中管理システム」を活用したクラスタ印刷を紹介。

⑤デジタル印刷機の新製品や参考出品相次ぐ

従来の単品実演やサンプル展示ではなく、プリプレスや後加工機との連携により多品種小ロット・高付加価値印刷の実演と5月末から開かれるdrupa2016向け参考出品もみられ

た。**FFGS**は、最新トナー機を2機種出展し小ロット高付加価値印刷を実演。B2枚葉 I J機はパネルと印刷サンプル及び導入社を動画で紹介。ワイドフォーマットプリンタも実演。**キヤノン**は、最新トナー機4機種を出展しブックオンデマンド、コマースシャルプリントを実演。朝日新聞社に納入した連帳 I J機は実物模型やパネル及びパノラマ新聞や子ども新聞のサンプルを紹介。



キヤノンの連帳 I J機

コニカミノルタは、最新トナー機3機種出展しコマースシャルプリントを実演。29インチ枚葉 UV I J機の印刷サンプルとラベル印刷機のライブデモと I J校正システムも出展。**リコー**は、最新トナー機3機種出展し、高生産性や多色印刷の実演とラグビーチームを題材とした各種印刷物を展示して幅広い活用を PRした。連帳 I J機はビデオと高品質の印刷サンプルを配布した。**メディアテクノロジー**は、最新連帳 I J機をパネルと印刷サンプルで紹介し、中国で8ラインの導入を発表。本紙校正用 I Jブルーフも実演。**日本HP**は、液体トナー機と可変ソフト Mosaicによるデザインバリエーション印刷をサンプル展示。連帳 I J機は1インチあたり2400ノズルの新高精細ノズルアーキテクチャにより出力した印刷サンプルを展示。**ハイデルベルグ・ジャパン**はトナー機の実演と工業3Dプリンターをパネル展示した。

⑥無処理CTPの進展紹介

昨年のJANPSやIGASで紹介された無処理CTPプレートが相次いで出展された。**FFGS**は「刷版・印刷工程の省資源」をテーマに、新聞向け完全無処理サーマルCTPシステム(新

聞協会技術開発賞)と商業印刷向けを紹介。商業印刷向け新製品の技術発表も行った。**日本アグファ**は、「速乾印刷、国内800洞突破」の実績をもとに現像レスプレートを紹介。**三菱製紙**は、サーマルグリーンプレートシステムとして商業印刷向けセッターと完全無処理ネガタイププレートを出展。

なお、コダックは今回出展しなかった。

⑦後加工機の花盛り

印刷物の多品種・小ロット化、パーソナル化による付加価値向上と自動化、生産性向上を実現する様々な後加工機が多数出展された。**ホリゾン**は、後加工機大手として小ロットやバリエーション生産を実現するデジタル印刷向け製本システム「Smart Finishing Solutions」の実演のほか、シートカット&クリーサー、ロータリーダイカッターなど多機種を出展。**デュプロ**は、中綴じ製本機、セグメント丁合機、高速宛名検査装置などを実演。**コニカミノルタとメディアテクノロジー**からは加飾加工機の印刷サンプルが展示され賑わった。

⑧経営支援、マーケティングサービス

日本アグファは、「印刷現場は宝の山！」をテーマに、ユーザーの利益をコミットする経営改革プログラム「A-SAP (Agfa System And Printing)」を初めて紹介した。**FFGS**は省資源ソリューション「SUPERIA」によるコスト削減や収益アップと実践企業を紹介。**シンフォニーマーケティング**は、基調講演で説明した「BtoB向けマーケティングオートメーション」の概要を紹介した。

おわりに

わが国の印刷メディア界は、オフセット・デジタル印刷を融合・連携する「ハイブリッド印刷ソリューション」がpage2016を機に進みはじめている。新聞メディア界のハイブリッド印刷ソリューションは、CONPT-TOURも視察するdrupa2016を機に進展すると予想されているので大いに期待したい。

楽事万歳

「積読」「入れ読」「並べ読」

日本経済新聞大阪本社 製作本部長

矢木 正哉

ご多聞に漏れず、積読(つんどく)の病がある。読まずに「積んでおく」と「読書」をかけた駄洒落だが、意外に古い言葉で、明治の昔からあるようだ。



ありふれた悪癖ではあるが、どうも年々ひどくなっている。書棚に並べた本を見ると、4分の1は未読のようだ。ブックカバーを外してみたら、思わず「えっ」と声が出た。同じ本が2冊ある。それも3ペア……。

買ったまま手付かずで、また同じ本を買ってしまう——その繰り返しのようだ。ボケの始まりのような気もしないではないが、それにしても馬鹿馬鹿しいやら、もったいないやら。

「このままではいけない」。昨春の大阪転勤の際に、未読の本をごっそり新居に持ち込んだ。単身赴任の狭い家に、本を高く積みあげてみる。ずらりと並んだ背表紙が「早く読んでよ」と訴えかけてくる。久々に読書欲がわいてきた。

*

これで心機一転、未読の本は着々と減るはずだった。出張が多いので、行き帰りの新幹線でたっぷり読める、と高をくくってもいた。ところが、どうも作戦通りいかない。

重くてかさばる本を持ち歩くのが、次第に億劫になってきた。我ながらものぐさでお恥ずかしい限りだが、移動の車中は週刊誌片手の昼寝タイムになっている。1冊読み終えるペースより、新たに2冊買うペースのほうがはるかに速い。

むかし聞いた話だが、旅なれたアメリカ人は分厚いペーパーバックの本を破りながら旅をしていたそうだ。乗り換え、乗り継ぎのたびに読み終えたページを破り捨て、どんどん軽く薄くする——という寸法だ。モノを大事にする日本人には絶対真似できないなあ、と思ったものだ。だが本の重さにうんざりするたびに、そんな話がアタマをかすめる。

*

「やはり電子書籍しかないか」。本を破って捨てる度胸はないが、電子書籍なら重さも厚さも最初からゼロだ。紙媒体を愛する身としては、なかなか手を伸ばせなかったが、とうとう宗旨替えしてしまった。

使ってみると電子書籍は便利な代物だ。荷物にならないだけでなく、文字の拡大縮小は自在だし、暗い場所でも読めてしまう。おまけにしょっちゅう割引セールをやっている。「〇〇社の書籍すべて2割引」「まとめ買いで50%オフ」。あおり文句に乗せられて、ついポチッと購入ボタンを押してしまう。

気がつくと、電子書籍アプリの「本棚」に未読の本がずらりと並んでいる。確かに積読の山は増えなくなった。でも、端末に入れておくだけの「入れ読(いれとく)」や、画面に並んでいるだけの「並べ読(ならべとく)」は日に日に進行している。積読を解消するどころか、形を変えてさらにこじらせてしまったようだ。

*

しかし、救いの言葉をくれたのも読書だ。

最近読んだ林房雄の小説に「百巻の書は読むためにあるかもしれないが、万巻の書は集めるためにしか存在しない。百巻の書を読むためにすら、人生は短すぎるのだ」との一節があった。

実に心強い。以来すっかり達観し、新幹線でもすやすやと「放っ読(ほうとく)」を決め込んでいる。

あれ これ わが職場

社内ER

デーリー東北新聞社 システム技術局システム企画部次長 渡邊 聡

今日も部内の電話が鳴る。「患者は報道部Aさん、記者端末から異音がして起動しなくなった」「XX支局より、ネットワークが繋がらない」「XXの端末にウイルスが検知された」「支局の引越しなのでネットワーク工事をしてほしい」「自動組のプログラムでわからない所がある」

弊社では2015年より設立されたシステム技術局があり、その中で技術部とシステム企画部は、ITインフラ管理整備、端末管理、情報セキュリティ、WEB管理、広告、新聞制作システム管理、システム構築、紙面のグラフィック作成、カラー管理、紙面作製の支援までを担う。端末で新しいシステムを含めた企画資料を作成しながら、もう1つの端末でコーディングをし、紙面を作り、WEBではサーバ構築や監視をすることもある。患者(エンドユーザー)が困っていたら365日一義的に診断と一次治療を行い、必要に応じて各専門科(メーカーなど)に転送する。いわばIT系専門の社内コンサルティングと高度救命救急センターか、はたまたER的な存在になっている(と勝手に思っている・・・)。各部署に専門知識を持ったスタッフを置くことも難しく、アウトソーシングで業務を効率化することも可能だが、フロントエンドとバックエンドを同時に体験できるため、システム関連の臨床教育にはいい現場だと考えている。今やIT分野の革新は著しく、気を抜くと一瞬で周回遅れになる。現在の部署の立ち位置は社内全ての現場を知ることができるメリットもあるため、知識をどんどん吸収していきたい。

走れ!! 最強の駅伝チーム

(株)産経新聞印刷 北摂センター次長 表原 隆

第69回大阪実業団駅伝(1~7部に計899チーム出場)が1月中旬、ヤンマースタジアム長居とその周回コースで行われた。この歴史ある大会に、産経新聞印刷は平成22年の第63回から毎年2チームが出場、私は66回大会からチーム監督を務めている。6部からスタートして、これまでの最高成績はその66回大会の2部41位。しかし、その後2チームとも3部以下に陥落し、今回は再起をかけた雪辱戦だった。

チームを1つに絞ってレベルを上げるため、昨年10月、選手選考のタイムトライアルを3年ぶりに実施した。参加者は新入社員8人が中心で、その多くがメンバーに選ばれた。中でも大淀センターの太田侑也選手は高校時代に陸上部員だったうえ、社会人になっても陸上を続けているためズバ抜けていた。最も距離の長い第1区(7.1キロ)を担当してもらい、2区松田拓馬、3区大石嶺、4区徳永貴雄、5区坂口敬斗、6区藤原明眞の各選手(1,2,5,6区が新入社員)で大会に臨んだ。

大会本番、太田選手はスタートからトップ争いの走りを見せ、その力強いフォームに観客席の応援団から驚きと熱い声援が飛んだ。2区、3区と次々にたすきが渡され、全員快調なペースで23・6キロを駆け抜けた。結果は3部98チーム中12位、タイムは1時間36分58秒。66回大会の記録を1分近く上回る、チーム最高タイムだった。これで来年の2部復帰はほぼ確定。出場できなかった新入社員も含め全員が集まり、健闘を称えあっていたのが感動的だった。

新入会のことば

《株式会社イワタ 代表取締役 水野 昭》

この度は日本新聞製作技術懇話会への入会をご承認いただきありがとうございます。日本の新聞製作技術を支える団体のメンバーになれたことを非常に光栄に思います。

これを機会に新聞業界発展のためにさらに努力してまいります。

＊

弊社は1920年に岩田百蔵が岩田母型製造所を創業以来、文字の可読性の高さとしさを理念に書体開発を行ってまいりました。

中でも2006年に発表した「イワタUDフォント」は「老眼や白内障・弱視でも見やすい」をコンセプトに日本で初めて開発され、社会に大きなインパクトを与えました。

新聞用書体にも大きなステップがありました。1941年(昭和16年)制限された紙面でより多くの情報を伝えるために「新聞用扁平書体」を開発。全国の新聞社へ広がり、現在の新聞書体の基礎となりました。

2009年に信濃毎日新聞社と共同開発した「イワタUD新聞書体」は高齢者の読みやすさを実現致しました。現在全国27紙にご採用いただき、新聞書体のスタンダードになりました。

そして2015年、女性や若者の読者を意識した新書体「イワタミンゴNP」を発表しました。より魅力的で、読者の興味を引きつける紙面で、読者の増加を狙うことを目的としています。

＊

弊社は書体を通じて新聞業界の発展に貢献してゆきたいと考えています。文字を使う媒体は紙に限らず、液晶画面など大きく広がっております。その様々な媒体の表現力を高めるツールとして書体は有効です。

これから懇話会会員各社の皆様と情報交換

を行い、力を合わせ、業界発展のために努力してゆきたいと考えております。

皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

《藤倉ゴム工業株式会社》

営業本部 印材営業部長 杉本 寿紀

この度、日本新聞製作技術懇話会の一員になれましたこと、大変光栄に感じております。

入会に当たり、上坂会長はじめ多大なご足労を賜りました関係者の皆様、また親切丁寧な同会の内容をご説明頂きました事務局の皆様、同会へのご推薦を頂きましたサカイク株式会社、東洋インキ株式会社にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

弊社では、自動車・電機関係の工業用ゴム製品の製造販売を行う工業用品事業を中心に、電材事業、ゴム引布事業、救命用いかななどの加工品事業、ゴルフ用シャフトを中心としたスポーツ用品事業、半導体・輪転印刷機用の空圧シリンダー・レギュレーター（減圧弁）を扱う制御機器事業、そして印刷用ブランケットの製造販売を行う印材事業と7部門の他マグネシウム電池・フレキシブルセンサーなどを取り扱う営業開発部門と8部門中2部門で印刷業界に関連した製品・部品の製造販売を行っております。弊社製品が今後多少なりともこの業界にお役にたてればと願っております。

長いこと新聞印刷関係に携わっていながらも、今まで日本新聞製作技術懇話会に加盟しておりませんでしたこと、お詫び申し上げますとともに今後は微力ではございますが、皆様と力を合わせ、新聞印刷品質の向上に努め、新聞業界、またはそれに関わる業界のさらなる発展に尽力する所存でございます。今後とも日本新聞製作技術懇話会の皆様にはご指導、ご鞭撻賜りたく、何卒宜しくお願い申し上げます。

第34回新聞製作人 新年合同名刺交換会開く

第34回新聞製作人新年合同名刺交換会が1月8日(金)午後3時30分から、プレスセンター10階大ホールで開かれた(写真)。参加者は新聞社関係62社132人、会員社41社206人のほか、新聞協会、CONPT事務局を含め345人と前年を大幅に上回った。

挨拶に立った三宅直人新聞協会技術委員長(毎日)は、株価続落、北朝鮮の「水爆実験」など年初のビッグニュースを受け、「動乱の予感」としつつ、「今年のリオ五輪、さらに2020年の東京五輪へ向け、新たな飛躍の年にしたい。CONPTとの意見交換を通じ、新聞人、メーカーの二人三脚で進んでいきたい。様々な切り口で提案を頂きたい」と語った。



上坂義明CONPT会長は「今年、会員社43社になる。会員社を増やし、元気なCONPTにしたい。新聞社との技術論を進め、新聞界のお役に立つよう頑張りたい。製作に限らず様々な部門で新しい発展を目指して提案していく」と述べ、新聞各社との技術対話を呼びかけた。次回のJANPSについては「充実した展示会となるよう、協会と検討を重ねていきたい」語った。さらに、今年の海外視察団について、6月にデュッセルドルフで開かれる

drupa視察を中心としたCONPT-TOUR2016、秋にはウィーンで開かれるWPE視察TOURを計画していることを表明し、参加を呼びかけた。

尾崎和典新聞協会技術副委員長(読売)の乾杯の発声で歓談に移った。昨年を大幅に上回る方々の参加とあって、極めて密度の高い歓談の場となった。中締めは藤間修一CONPT副会長が務め、今年への期待を込めた三三七拍子で午後5時過ぎにお開きとなった。

(事務局)

会員消息

■新入会(会員総数43社)

* ㈱イワタ(2月1日付)

(〒101-0032)

千代田区岩本町3-2-9

TEL: 03-5820-3161

FAX: 03-5820-3174

代表者: 水野 昭氏(代表取締役)

担当者: 阿部 浩之氏(第一営業部部长)

* 藤倉ゴム工業㈱(2月1日付)

(〒135-0063)

江東区有明3-5-7

TOC有明イーストタワー10F

TEL: 03-3527-8484

FAX: 03-3527-8520

代表者: 杉本 寿紀氏

(営業本部印材営業部长)

担当者: 笠原 淳氏

(営業本部印材営業部新聞チームリーダー)

■担当者変更

* 方正㈱(1月4日付)

[新] 福島 知美子氏(新聞事業部事業部长)

[旧] 松邑 康弘氏(常務執行役員営業推進担当)

■所在地変更

* 日本新聞インキ㈱(2月1日付)

(〒210-0858)

神奈川県川崎市川崎区大川町13-8

TEL : 044-589-3500

FAX : 044-333-3222

■新会友

* 徳永正裕氏(元事務局マネージャー)

CONPT 日誌

12月11日(金)第41回年末全体会議並びに芝則之氏、徳永正裕氏、木村禮氏への感謝の集い

(於日本記者クラブ・会見場、来賓3名、会員社29社36名、会友他7名参加)

25日(金)仕事納め

1月5日(火)仕事始め

8日(金) JANPSに関する意見交換会

(於日本新聞協会役員会議室) 第34回新聞製作人新年合同名刺交換会(於日本プレスセンター、345名参加)

21日(木)広報委員会(出席12名)

2月9日(火)クラブ委員会(出席9名)

12日(金)企画委員会(出席10名)

16日(火)広報委員会(出席9名)

18日(木)評議員会(出席8名)

25日(木)第117回技術懇談会

(読売新聞社・仙台工場見学会)
(27名参加)

新着資料

(国内)

* 新聞協会“新聞技術” No.233~234

“新聞印刷ハンドブック”第3版

“日本新聞年鑑2016”

“新聞広告報” 762~763号

“NSK経営リポート” No.25

* 富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ

“FGひろば” Vol.163~164

(海外)

* WAN-IFRA “World News Publishing Focus” 5~2月号

第41回欧州新聞製作事情視察団募集のご案内 (CONPT-TOUR2016)

今年は、ドイツ・デュッセルドルフで開催されるdrupa2016をメインに、イギリス、イタリアの新聞社、印刷工場を訪問し、最新の新聞事情を視察します。

今回は、6月2日(木)~6月10日(金)の9日間コースを設定いたしました。

訪問先ならびに行事の概要は以下の通りでございます。多くの方のご参加をお待ちしております。

◇ 訪問先

[ドイツ・デュッセルドルフ]

drupa2016 視察 WAN-IFRA特別セミナー

[イギリス・ロンドン]

FINANCIAL TIMES社 本社・工場 (交渉中)

[イタリア・ミラノ]

Il Sole 24 Ore社 本社、CSQ社 工場、現地研修会

◇ 費用 698,000円

◇ 募集締切 3月31日(木)